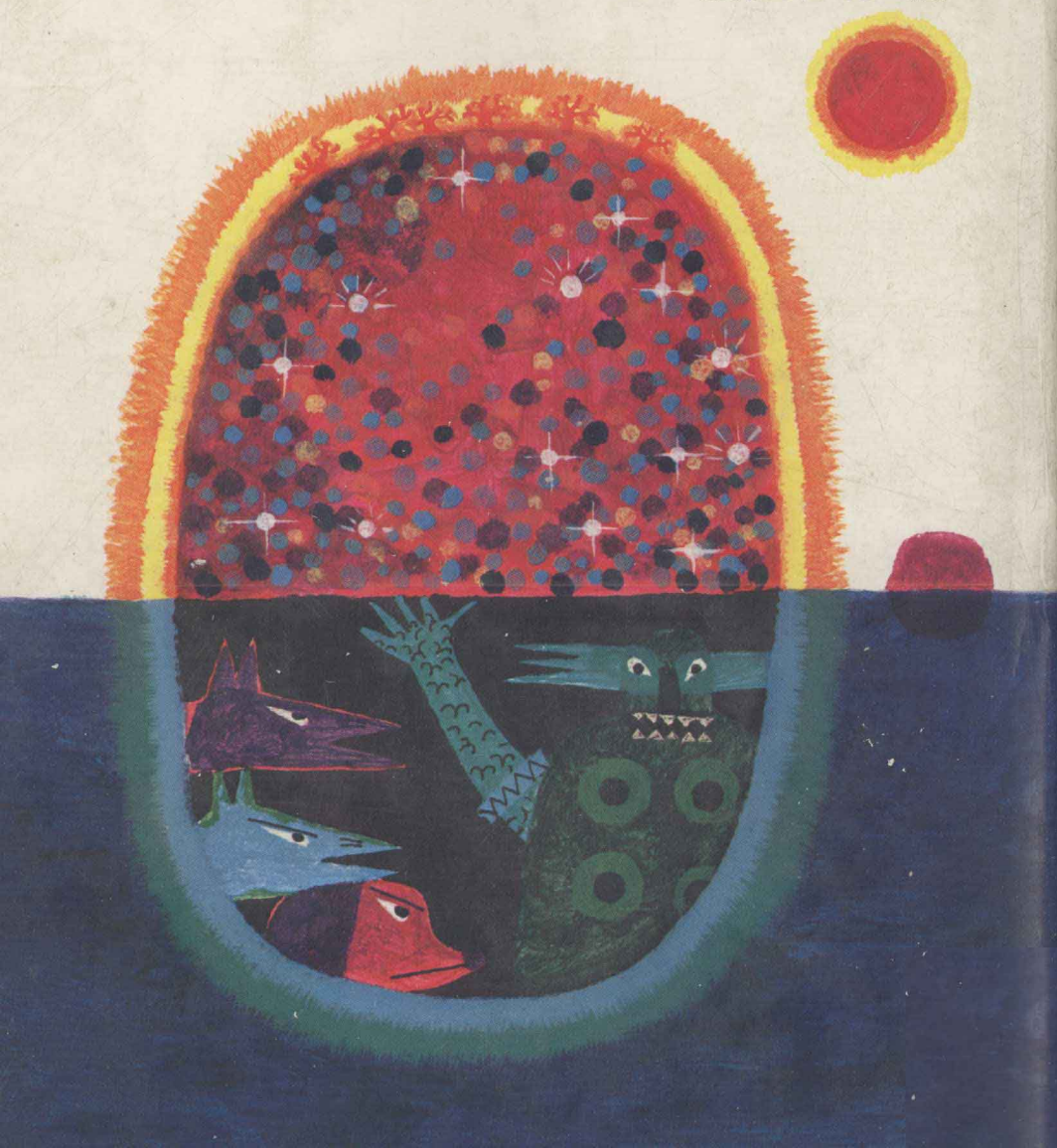


まぼろしの金持ち島

チャン テン イー
張 天翼・作

伊藤敬一・代田智明・訳

渡辺和行・絵



まぼろしの金持ち島

・5

伊藤敬一・代田智明・訳
渡辺和行・絵



933	チャン	テン イー
	張	天 翼 作 (伊藤 敬一・代田 智明 訳) まぼろしの金持ち島 中国の児童文学 5 太 平 出 版 社 1977 186 P 22cm

伊藤 敬一 いとう けいいち 1927年愛知県に生まれる。東京外国語学校・東京大学中国文学科を卒業。現在は東京大学教養学部教授として、現代の中国文学および童話を研究。おもな訳書に『鼻のないゾウ』（太平出版社刊）、『羅文応の物語』『離婚』『中国の古代神話』などがある。

代田 智明 しろな ともあき 1951年東京に生まれる。現在、東京大学人文科学系大学院在学中。中国文学専攻。

渡辺 和行 わたなべ かずゆき 1927年東京に生まれる。52年東京美術学校工芸科卒業。日本楽器デザイン室勤務をへて、68年からフリーのイラストレーターとして児童書、幼稚園雑誌などで活躍している。

まぼろしの金持ち島 母と子の図書室 34-43

1977年7月14日 第1刷発行 ￥1100

1977年11月25日 第2刷発行

著 者 張 天 翼

訳 者 伊藤 敬一
代田 智明

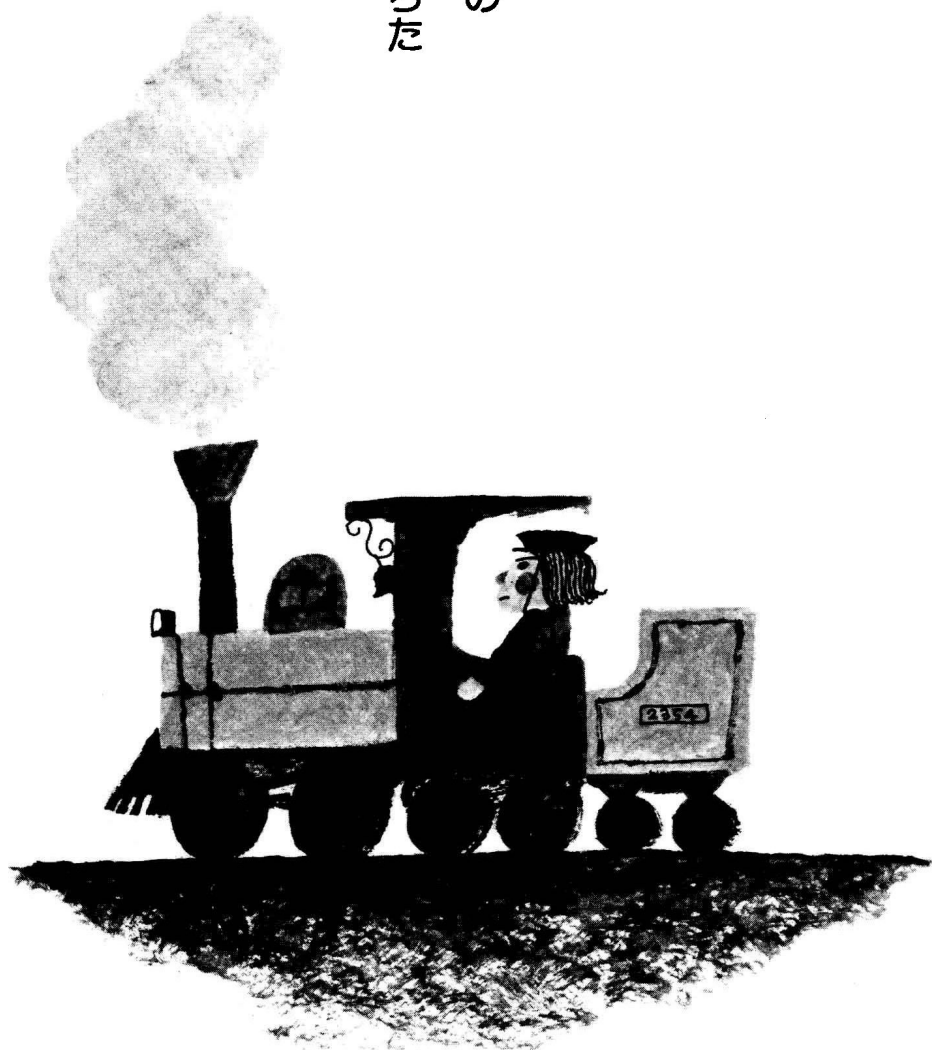
発行者 崔 容 徳

発行所 東京都千代田区神田神保町1-46-2 美成社ビル

株式会社 太平出版社◎

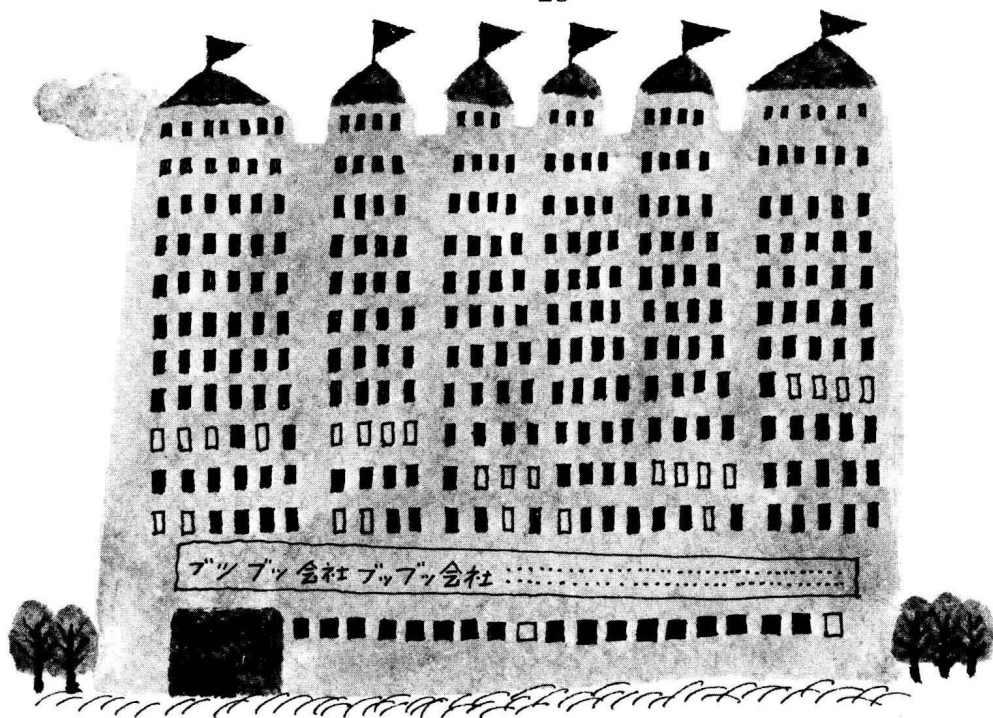
電話 03-295-3531 振替東京1-99563

この本は、
みなさんを
中国の
みなしごの兄弟の
ゆめと冒険にみちた
ふしぎな世界へ
あんないします。

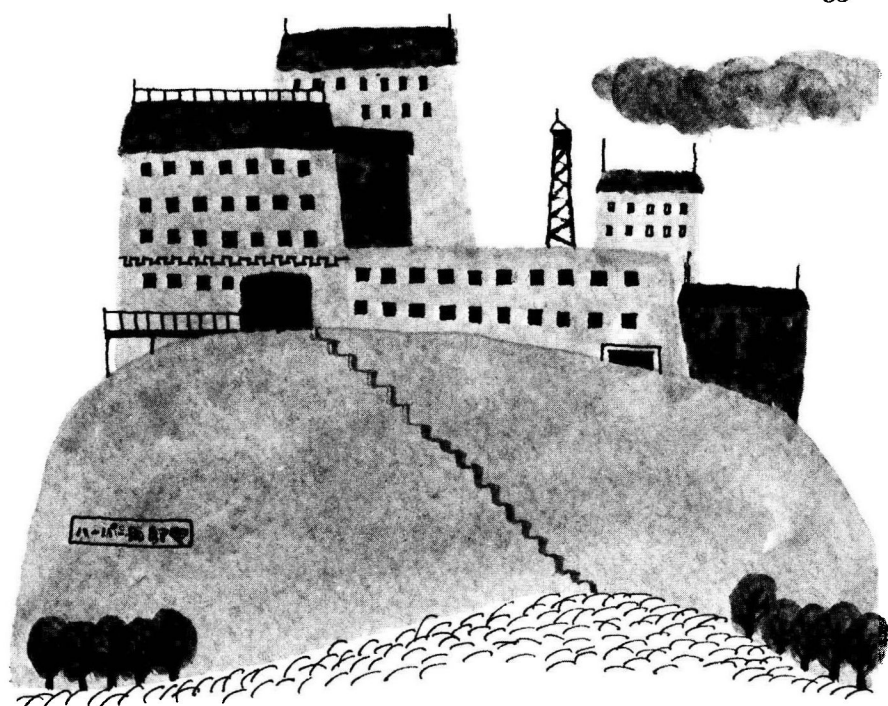


まぼろしの金持ち島 もくじ

- 1 山のような怪物 かいぶつ 12
- 2 タアリンとわかれて 18
- 3 売りとばされるシアオリン 28
- 4 足 そく 刑!? 36
- 5 ふしぎなたまご 48
- 6 チョンマイおじさん 56
- 7 シアオリンの手紙 62
- 8 天使の歌 てんし うた 67
- 9 幸福がやってきた こうふく が やって きた 76



19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
まぼろしの金持ち島	アリとミツバチ	クジラにのまれる	チーチイがあぶない	機関手シアオリン	たまごが人間になる	五メートル競争	デブになったチーチイ	大パーティー	チーチイはタアリンのこと
171	162	156	146	133	124	112	102	92	83
あとがき									
179									



1 山のような怪物^{かいぶつ}

むかし、いなかに、とても貧乏^{びんぼう}な、お百姓^{ひやくしやう}さん夫婦^{ふうふ}が住^すんでいました。ふたりとも、ずいぶん年をとっていて、じぶんたちにも、いくつなのか、わからないほどでした。

ある日、その夫婦にひよっこり、ふたりの子どもがうまれました。

おじいさんは、うれしくなってさげびました。「わしらに、子どもができたぞい！　こんな年で、まだ子どもができるなんて、わしは考えもしなかったわい。」

おばあさんも、たいそうよろこんで、いいました。「ふたりに、いい名まえをつけてやらなきゃねえ。」

どんな名まえを、つけるんでしょう？　おじいさんには、けんとうがつきません。字典^{じてん}をめくって、でてきた字をつけようかい——。

一、二の、三でパツとめくると、こりゃ「菜^{ツァイ}」の字。兄^{にい}さんがタアツアイ（大菜）で、弟^{おとうと}がシアオツアイ（小菜）ですか？」

「むむ、わしらは、ろくろくめしも食えんのに、「菜^{ツァイ}」（おかず）どころじゃないわい！」

おじいさんは、ひとりごとをいっています。もう一回めくると、こんどは「肥」(こやし)の字、やっぱりうまくない。めくっても、めくっても、うまい字はみつかりません。

こんなふうに、一晩じゅうめくっているうちに、とうとう、空があかるくなっていました。それで、おじいさんは、くわをもって、畑へでかけていきました。外は、お日さまが林を照らしています。

おじいさんは、よろこんでさけびました。「よっしゃ、林の『リン』とつけよう。」

名まえは、きまりました。兄さんのほうはタアリン(大林)、弟のほうは——もちろんシアオリン(小林)。

それから十年たって、おじいさんとおばあさんは死にました。

死ぬまぎわに、ふたりは、タアリンとシアオリンにこういいました。「うちにゃ、なんにもないから、おまえたちは、外へでて仕事をせにゃならん。わしらが死んだのちは、わしらを、裏の小山にかつきあげておくれ。山のカラスが、わしらに墓をつくってくれるだろうて。そしたら、おまえたちは、必要なものをもって、仕事をさがしにいくんだぞ。」

それで、タアリンとシアオリンは、父さんと母さんの死骸を、小山の頂きにかつきあげました。そして、ふたりが山をおりていくと、木にとまっていたカラスが、いっせいにとびおりてきて、カ

アカアとないては、土をついばみ、死んだふたりの老人のために、塚をつみあげました。

「兄ちゃん。」シアオリンは、タアリンにいました。「おいらたち、はやくしたくをして、仕事をさがしにいこうよ。」

ふたりは、うちにもどりました。そして、ちいさな袋に米をいれて、せおい、ぼろ着と、そまつな茶わんを麻袋につめこんで、家をでていきました。

シアオリンは、いいました。「これから、どこへいくの？」

ふたりは、おとうさんとおかあさんがいなくなったことを、おもいだして、さびしくなりました。それに、どの道をいったらよいのか、わからないのです。ふたりは地面にすわって、なきだしました。

まわりの山や、田んぼや木は、みんな他人のものです。ふたりには、知っている家も人もありません。

やがて、夜になりました。お月さまが星たちをひきつれてあらわれ、ふたりにむかって、まばたきをします。タアリンとシアオリンは、まだなっています。

なっているうちに、お日さまはねむりからさめて、ニコニコとのぼってきました。

シアオリンは、涙をぬぐっていいました。「兄ちゃん、まだなくの？ おいら、もうなかない！」
「うん、おいらも、なくのいやになったよ。でかけよう。」

ふたりは、道のみわけがつかないので、ただ、まえへむかつてあるいていきました。しばらくあるいただけで、ふたりがもってきたすこしばかりの米は、もう、たべつくしてしまいました。

「ぜんぶ、たべちゃった。これから、どうしよう？」　タアリンは、そういいました。

「すこし休んで、それから、食べ物^{たもの}をさがそうよ。」

そこで、ふたりは黒い山のおもとにこしをおろして、やすみました。

タアリンは袋をながめて、フーッと、ため息^{いき}をつきました。「おいら、大きくなったら、きっと金持^{かねもち}になるんだ。金持はうまいものがたべられるし、いい着物^{きもの}が着られる。それに、なにもしなくていいんだもの。」

シアオリンは、反対^{はんたい}していいました。「えっ！　とうちゃんがいったろ、『人間は、はたらかなきゃいけない』って。」

「とうちゃんは、貧乏人^{びんぼうにん}だったからさ。金持のなんだったら、はたらかなくてもいいんだ。とうちゃんはいったよ、『なあ、田んぼや畑^{はたけ}をもってる人は、どんなにかいいだろう！』ってな。」

「とうちゃんもかあちゃんも、貧乏人だったけど、金持みたいがいい人だったじゃないか。」

「だけど、金持はやっぱりたのしいよ。」　タアリンは、大声でいいました。「貧乏人なんか、ちっともたのしくないや。仕事しなくちゃならないし、それに……。」

そのときとつぜん、雷^{かみなり}がおちたような、大きな大きな音がしました。

「なにをしなくちゃなんねえって？ おまえたちを、食^くわなきゃってことよ。」

タアリンとシアオリンは、たまげてひっくりかえってしまい、ふたりのもっている袋^{ふくろ}までが、ブルツとふるえました。

だれが、しゃべっているのでしょうか？ ひとつ子ひとりいません。ふたりは、たがいにだきあいました。顔^{かお}から、汗^{あせ}が雨のようにポトポトおち、ふたりの足はガタガタふるえました。まわりをみまわしましたが、なんにもみえません。

タアリンは、いいました。「いったい、しゃべってるのは、だれ？」

「わかんないよ。」

それからしばらくすると、わかりました。ふたりの目のまえの黒い山が、とつぜん、うごきだしたのです……。

「地震^{じしん}だあ！ はやくにげろー」 シアオリンが、さけびました。

ふたりがはしりだすと、その黒い山はうごくこと、うごくこと、すーっとたちあがりました。

怪物^{かいぶつ}?!——それは人間でもない、けものでもない。じつは、この怪物は、ここでねむっていたのです。この怪物を、ふたりは黒い山だとおもっていたのです。

怪物は、まっすぐにたちあがり、大きな目から、緑^{みどりいろ}色の光をだしています。そして、草のはえた手をのびし、タアリンとシアオリンを、つかまえてたべようと思いました。

ふたりは、怪物にたべられてしまうのでしょうか。

タアリンは、こうおもいました。「おいらたち、とうちゃんもかあちゃんも、いなくなつたし、食べ物もたべつくしちゃった。それに、田んぼも畑も、お金もない。なんにもないんだから、いっそのこと、怪物にたべられてしまおうか。」

シアオリンは、大あわてにあわてました。にげようとしても、にげきけません。怪物の手が長く、どんなに遠くへにげていっても、ひとつかみに、つかまえられてしまうのです。怪物は、食べ物があるとわかると、ニタニタわらって、タアリンとシアオリンをながめています。

シアオリンは、怪物にたずねました。「どうしても、おいらたちをたべるの？」

「食わなくなつて、いいんだぜ。けれどもよ、おれに宝物をもつてこなくちな。」

「宝物！ おいらたち、みたこともないよ。」

「へへへ、それじゃ、きのどくだが、いただきます！」

シアオリンは、タアリンに耳うちします。

「にげよう。」

「でも、あいつは、すぐにおいついちゃうよ。」

「だから、べつべつの方向にわかれてにげるのさ。そうすりゃ、あいつはきっと、ひとりもつかまえることができないよ。」

一、二の、三！ タアリンは東へ、シアオリンは西へむかつてにげました。怪物はタアリンをおかけようとしたが、シアオリンもつかまえたいとおもひ、東へフラフラ、西へフラフラ、とうとう、どちらもつかまえることができませんでした。

タアリンとシアオリンは、ふたりともにげてしまい、麻袋だけが地面にのこっています。怪物ははらペコだったので、その麻袋をひろってたべました。けれども、じぶんの口はあまりにも大きいのに、麻袋はあまりにも小さいものですから、齒のあいだにはさまってしまいました。怪物は、マツの太木をつまようじのかわりにして、やつとのことで、麻袋をぬきとりました。

怪物は、おもいました。「さあて、やっぱり、またねむとするか。」

お月さまが、もう、でていました。まゆ毛のかたちのような三日月です。怪物が背のびをする、のびした手が三日月のトンがりにつかり、手の皮がやぶれてしまいました。怪物は、くやしそうにベツと、つばをはいて、「ちえっ！ まったく、ついてねえや。」

2 タアリンとわかれて

シアオリンは、十キロくらいつつ走って、ある谷あいに来てきました。そして、ちらっとふり

かえると、怪物はおいかけてこないの、やっ、と、たちどまりました。息はぜいぜいと、ひどくはずんでいます。

シアオリンは、さげびました。「兄ちゃん！ 兄ちゃん！」

けれども、兄ちゃんが、じぶんとは反対の方向へにげたことを、おもいました。兄ちゃんがどこへいったのか、もう、わからなくなったのです。

シアオリンは、なきたい気持でしたが、ぐったりつかれていました。それで、草の上に横になると、ぐっすりねむってしまいました。

そのうちに、お月さまがでてきました。シアオリンの目のふちにたまった涙のつぶが、キラキラと光っています。

シアオリンがぐっすりねむったところ、ふたりの紳士が、かれのちかくを通りかかりました。ひとりは大で、ピーピーといい、もうひとりキツネで、ピンピンといえます。かれらはふたりとも、なかなかおしゃれです。ピンピンのかぶっている帽子は、とくにすばらしく、銀でつくったものようでした。

ピーピーは、ピンピンにいました。「本日はわたし、じつに、ついておるのです。革のトラנקをひろいましたからな。」

「ほう、革のトラנקには、なにがはいってましたか。」ピンピンが、ききました。

「あんたでも、けんとうがつかんでしょうなあ。トランクの中は、箱いっぱいのハエでした。」

「箱いっぱいのハエをひろったところで、なんにもなりませんでしょうが。」ピンピンが、いいました。ピンピンは、なかなか、学問がくもんのある紳士しんしなのです。

ピーピーは、大声をだしました。「それじゃあ、ピンピンさん、あんたはどんなものをひろったら、気にいらいますかな！」

「わたしのかんがえでは、もっともいいのは、人間を一匹いっぴきひろうことですな。」

「これはまた、やさしいこと。わたし、たしかに、その幸運きうんをみつけてみせますぞ。」

ふたりはしゃべりながら、シアオリンのそばにやってきました。

ピーピーはシアオリンをみたとたんに、とびあがるほどよろこんで、さけびました。「ピンピンさん、ピンピンさん！ わたしはいいました、かならず、人間をひろってみせるとね。ハッハッハ、あんのじょうです、ごらんさい。」

ピンピンは、ほおをさすっては、うらやましそうにピーピーをみています。ピーピーは、ばか力があるので、ちょっと、シアオリンのえりもとをつかんで、シアオリンをひっぱりあげてしまいました。

「ピンピンさん、この人間一キロあたり、ねだんをいくらにつけますかね。」

シアオリンは、まだ目がさめずに、ムニャムニャいっています。「おいら、ねむいんだよう……。」

あんたたち、ガヤガヤ、うるさいなあ……。」

ピーピーはひどくわらいだして、「なに、おまえは、わたしたちがおまえを、たたきおこしたというのか。ワッハッハッ、わたしは、おまえをひろったのだ。おまえは、わたしのものだ。」

シアオリンはびっくりして、すっかり、目がさめてしまいました。これはまずい。なんて、ついでないのでしょうか。

シアオリンは、いいました。「なんだって？ おいら、ぐっすりねむっていたんだ。あんたに、なにをしたっていうの？」

「とにかく、おまえは、わたしがひろったのだ」と、ピーピーはいいました。

「あんたがおいらをひろって、それでなぜ、おいらがあんたのものなの？」

「もちろんだ。うそだとおもうのなら、あの人にきいてみなさい。」ピーピーは、ピンピンを指さしました。

ピンピンは、まっ白な耳を地面につけて、シアオリンにおじぎをすると、こういいました。「この世界には、はっきりと、つぎのようなきまりがありますからね。つまり、だれがなにをひろっても、それは、ひろった人のものになるのである。ピーピーさんはおまえをひろったのであるから、おまえは、ピーピーさんのものになるのである。」

シアオリンは、目をこすってピーピーをみ、それから、ピンピンをみていいました。「おいら、

世界にそんなきまりがあるなんて、信じないよ。」

「おまえが信じないのなら、しかたがない。わたしたちの法律は、そのようにきまっているのでね。わたしがおまえをひろったからには、おまえはわたしのものだ。ただし、金のべ棒を一千本、わたしにくれるというなら、おまえを、自由にさせてやってもよいぞ」と、ピービィはいいました。

シアオリンは、力いっぱいもがきましたが、どうしようもありません。ピービィは、ばか力でしっかりとシアオリンをつかんで、はなさないのです。

シアオリンは、どなりました。「おいらは、あんたのものじゃないよ！ あんたにあげる金のべ棒もない！ おいら、こんな法律を信じるものか。いやだい！」

「この法律があるのかどうか、たしかめに、わたしといっしょにききにいく、というのはどうだと、ピービィはききました。」

「いいよ、おいらとあんたで、王さまにききにいくんだ。」

「よし、ではいくとしよう。」

三人は、でかけました。

ピービィは、まだ、シアオリンをつかんだままでしたから、シアオリンはいいました。「ピービィさん、あんた、おいらをつかんであるいてくれて、ありがとう。おいら、つかれちゃって、あるこうにも、あるけないんだから。」